

アートミーツケア学会 News+Letter Vol.4 2008 Winter

CONTENTS

特集 子どもとともにつくる文化

阿部 祥子 石田 陽介 高橋 綾 松田 明 渡邊 あい子

- | エッセイ 高齢者介護施設でのアートクラス—自らを取り戻すために— 藤原 ゆみこ
- | コラム アートはこころのクスリ④ ホスピタルアートの課題と可能性 森口 ゆたか
- | インフォメーション アートとNPO アートサポートふくおか 古賀 弥生
- | インフォメーション アートミーツケア学会誌第2号投稿募集のご案内 入会のご案内



子どもとともに つくる文化

未来をにう子どもたち。子どもがもつ自由な発想にもとづく創造性や世界を受け止める想像力。子どもがそのような力を存分に育むことができる環境をつくっていくために、私たちには何ができるのでしょうか。また、そのような力を育むことができる社会とはどのようなものなのでしょうか。今号では、子どもとともに考え、とりくむ、さまざまな実践を通して、大切な、しかし現代の社会で忘れられがちになってしまっている、もう一つの世界の捉え方を探っていきたいと思います。そして、子どもと大人の新しい関係、子どもの感性を軸にした文化について考えます。

子どもと大人と医療の間に立つ、翻訳者としての絵本 ～医療現場での絵本カーニバル～

阿部 祥子 九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクトテクニカルスタッフ

知らない国に冒険にでかける、妖精と一緒にお祭りをする、北極で暮らす白くまについてもっと知る。ひとたび絵本を開くと、そこにはいろんな世界、さまざまな体験が待っています。

私たち九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクトは入院する子どもたちへの“体験の選択肢”として「絵本カーニバル」を届けたいと考えました。入院している子どもたちは、治療を優先させなければならないために、“自分で何かを選び取る”機会が少ないのではないのでしょうか。病気を治療するために入院しているのですから、気分が悪くても、痛くても我慢しなければならないときもあるでしょう。しかし、病院にいたからこそできた楽しい体験があってもいいのではないかとわたしたちは思います。そこで、入院している子どもたちの生活空間に、毎月250冊、毎月テーマを設定しそのテーマに沿って絵本を並べる取り組みをはじめました。

「絵本カーニバル」とは



「絵本カーニバル」は目黒実さん(九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト特任教授)が10年ほど前から東京や大阪で、ホテルや商業施設を会場

として開催してきました。4年前に目黒さんが九州大学へ招聘されたのをきっかけに、「絵本カーニバル」は「子どもの居場所に関わる実践研究」として、九州を中心に美術館や博物館、地域の居場所づくりとして道の駅や学校などで数多く開催されてきました。

絵本カーニバルとは、絵本を展示し、そこで子どもたちが絵本を読むだけでなく、さまざまな出会いが生まれる場づくりです。絵本カーニバルの開催により世代間の交流が生まれ、いまや市民の手によって毎年開催している町が多くなりました。多くの世代を惹きつけ、そして繋げる絵本のもつ魅力を、ぜひ医療現場にも届けたいと考え、病院における「絵本カーニバル」ははじまりました。医療現場における「絵本カーニバル」は小児科、子ども病院、緩和ケア病棟などでこれまでに合計28回開催。なかでも九州大学病院小児医療センターでは長期入院の子どもたちへ向け“子どもたちの生活空間に絵本を数多く登場させること”をコンセプトに2007年2月より毎月継続して開催しています。

子どもたちも気になる絵本

はじめて長期入院の子どもたちへ向けた「絵本カーニバル」を

企画したとき、医療関係者から不安の声があがった絵本がありました。それは、「いのち」や「病気」についての絵本です。とてもデリケートになっている子どもたちもいることから院内に展示されることへの心配があったということでした。

しかし、医師や看護師の方々と共に絵本の内容を検討し、他の絵本と混ぜ少しずつ「いのち」や「病気」についての絵本を展示していくと、意外とそのテーマの絵本が子どもたちに多くの支持を得る結果となりました。担当する小児科の医師はこう言います。「今まで子どもたちは「いのち」や「病気」については、気にはなっていたけれど、大人には聞いちゃいけない、話題にしちゃいけないことなのだと思っていたのではないだろうか。誰にでも目につくところにそれらをテーマとした絵本が置かれ、自然に大人の前でも読めることをきっかけに、きっと子どもたちの中でこれらのテーマが公の話題として「解禁」されたのだと思う」。

緊迫する状況が続く病院という場所の性質上、子どもたちは大人たちのことを、うんとよく見ているように感じます。「いのち」について「病気」について、子どもたちが大人から「説明してもらおう」ことを待つだけでなく、自らが知りたいという気持ちに対してアクションを起こすとき、「絵本」はその気持ちに応えてくれるものと成り得るのではないのでしょうか。

空間が変わる

この「絵本カーニバル」にはいくつかの特徴があります。そのひとつとして、全ての絵本が顔を見せていることが挙げられるでしょう。絵本をたくさん並べるとき、スペースの問題からも背表紙を向けて並べられることが多いかと思いますが、「絵本カーニバル」では全ての絵本の表紙を正面として並べ、インスタレーションとしても楽しめるよう配置します。本の顔が見えるその光景は、私たちの生活空間に主人公がたくさん増えたようにも感じます。病院内の廊下に沿って並べられた絵本たちを見て、急ぎ足で移動する看護師さんも、「うわあ、ここ、なんだかわかんないけど、楽しい！」そんな独り言を言いながら、急ぎ足からスキップに変え、廊下を去っていくのでした。

コミュニケーションが生まれる

絵本カーニバルでは医療スタッフや入院する子ども、家族からオススメの絵本を選んでもらい、展示する、「皆で選ぶ絵本カーニバル」を開催することがあります。そのような催しをすると、いつもとはまた違った反応が見られます。

“絵本”を共通項に、子どもの頃に好きだった本が意外と同じだっ

たことがわかったり、はじめてその本を読んでみておもしろかった感想を推薦者に伝えたり、というコミュニケーションが生まれました。それは0歳から18歳の子



歳の子どもたちが入院する病棟において、子ども同士、子どもと大人、それから大人同士でも医療スタッフ同士でも生まれているようです。

誰かが特別な知識や情報を持っているわけでもない。子どもだから、大人だからといったことに関係なく、ただ目の前の絵本について「どうだったか」を話すだけ。それだけのことで、医療現場という特殊な目的をもった場所で、それはそうでない場所での出来事に比べても、とても意味を持つことのように感じます。

小児科病棟の子どもたちと「旅する絵本カーニバル」

石田 陽介 九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクトアドバイザー

地域社会における子どもたちの新たな居場所づくりをめざし、各地において開催してきた「旅する絵本カーニバル」は、小児科医療の現場において今、新しい展開を始めています。ひと月のうち一週間、「旅する絵本カーニバル」を開催している小児科病棟では、闘病中の子どもたちが心惹かれる絵本を自由に手にとり、母や父の声を通しながら心ゆくまで多くの物語に身を浸すことができます。廊下や待合スペース等に展示する全ての絵本は表紙側を向けられることによって子どもたちへとフェイス・トゥ・フェイスで、それぞれが抱える物語の魅力を存分に語りかけていきます。その一冊一冊から零れる魅惑的な表情に見つめられ呼びとめられながら、子どもたちやその父母がそれぞれにおめがねに合った一冊を選びとり、ある時は病棟の廊下で、ある時は病室で、大切な家族とともにその扉を開き物語の旅へと出かけるのです。もちろん、医師や看護師等の医療スタッフも一人のオーディエンスとして自由に絵本を眺め、時に嬉々として手にとっていきます。

絵本そして児童文学とは、子どもをはじめとする全ての読者に向かって、この世に生まれきたことの肯定を謳う文学です。たとえ悲劇というカタチやアンハッピーエンドという結末をとろうとも物語の根底では今こうして生きていることへの祝祭、人生とは生きるに足るものなのだという希望の灯を読者の胸へと燈そうとする文学なのです。そんな祝祭性溢れる物語世界へ、家族に見守られながら自在に赴くことのかなうチケットを入院患者である子ども一人ひとりへと手渡ししていくこと、それが小児科病棟で開催する「旅する絵本カーニバル」の持つ大きなミッションでしょう。絵本には、人と人とが互いに時間を持ち寄り豊かに分かちあう機能が構造的に備わっています。演劇的身体性を持つコミュニケーション・アートである絵本。そうした一冊の絵本の内包する機能を深め、空間芸術として広げ立ち上げようとする「旅する絵本カーニバル」は、いわば「巨きな絵本」といえるでしょう。絵本作家の赤羽末吉さんは絵本を「掌の劇場」と語っていますが、絵本を読みあう親子の姿はまるで幸福感漂う一幕の舞台シーンのようにあり、その周りの人々をも優

子どもたちを見守る空間

絵本カーニバルの絵本は、数千冊の中から毎月テーマに沿って250冊を選ばし、病棟内に並べます。どれも自信を持って選んだものばかりです。しかしだからといって「絵本カーニバル」は、直接子どもたちに「この絵本を読んでください」と絵本を薦めることはしません。これは医療分野での絵本カーニバルに限らず、「読みたくなったら、読んでもいい」というスタイルを守っているためです。

それぞれの作家が大事に描いた絵本を、私たちスタッフも大切に一冊一冊全てを読み、絵本を選定していきます。積極的に子どもたちに呼びかけることはしなくとも、それらの絵本に囲まれていることによって見守られ、何かのときは誰かが一緒に居てくれる安心感を子どもたちが受けとることを願っています。



あべ・しょうこ 九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクトテクニカルスタッフ。関西学院大学総合政策学部卒。現在子どもプロジェクトにおいて長期入院の子どもと家族、医療スタッフを対象とした絵本カーニバルの企画・運営を担当。

しい気持ちに包んでいきます。こうした絵本を読みあう人の発する優しい光景を互いに響かせ借景しあいながら大きな時間を構築していく双方向性のアート、それが「旅する絵本カーニバル」なのです。

病棟空間における全てのオーディエンスは、「旅する絵本カーニバル」を彩る出演者であり、その場にいるオーディエンス全てが共演者という連なりを担い合う構造を持つのです。それは会場全体においてひとつの大きな感性の交歓が、まさにカーニバルとして生まれていくことを意味しています。医療空間という生老病死が混在するリアリズムの場でさえも、いや、だからこそ一層晴れやかな祝祭色を醸し出す物語世界こそを、病床に暮らす子どもたちは心待ちにしているのではないのでしょうか。医療空間として機能化された小児科病棟を、子ども性溢れる華やかなカーニバル空間へと一時の間変身させていく。そのとき絵本たちは子どもたちとともに手に手を取り合って千両役者として晴れ舞台を喜び勇みながら駆け巡っていくのです。そこでは子どもたちと絵本が出会いゆく姿が、まるで同心円を描くように明るく周りの空間を包みこみ、病棟全体をも優しい神話的時間の流れる憩いのアメニティ空間へと染めていくのです。

医療空間とファンタジー世界がごく自然なかたちで交わり共生する生命力豊かな汽水域を立ち上げ、病棟に暮らす子どもたちへささやかな寿ぎを贈ること、それが小児科医療現場における「旅する絵本カーニバル」なのです。「文化というのは、私たち人間の生きる力がなえた時、弱まったとき、くじけそうになった時に、私たち人間を支えて、生きる力を強めるものだ」と定義したい」とある方が述べられました。だとすれば文化とは、今なによりもケアの現場にこそ必要とされているものなのかもしれません。



いしだ・ようすけ 出版社勤務を経て、1999年より福岡野温泉病院にアートセラピストとして勤務。精神疾患を抱える人や認知症の高齢者を対象とした絵画療法を担当。2005年より九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクトに参加。子ども未来学の実践研究に携わる。アート体験における臨床の知を、広く市民のためのリハビリアートへと結ばれながら、クオリティ・オブ・ライフに繋げていくための実践活動を展開。

こどものための哲学

高橋 綾 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招聘研究員

ここは神戸市にある小学校の教室。こどもたちが机を向かい合わせにして議論をしている。テーマは、他人に親切にすることと「ありがとう」と感謝されることとの関係について。あるこどもが「自分が人に親切にするのは、「ありがとう」という言葉を聞きたいからだ」と言えば、他のこどもは「人に親切にすることによって、自分が幸せで満足しているから「ありがとう」はいらない」と言う。それに続いて「「ありがとう」を言ってと催促するより、自然に「ありがとう」と言われるほうが気持ちがいい」という意見も。先生はこどもたちの議論についていくのがやっとのようだ。



京都府洛南高校での哲学の授業。私たちがつくった対話ゲームをしている様子。

これは、私たちが小学校で行っている、対話をしながら哲学的に考える実践の一場面である。私たちは小学校の先生と協力してこうした対話を試みるほか、高校でも「勉強はなんのためにするのか」「戦争とは？」など、学校ではあまり触れられないテーマについて対話しながら、対話の内容を自分たちで振り返り、哲学的に考えるとどのようなことを議論する講座を運営している。

こうした活動は、「こどものための哲学 (Philosophy of Children: P4C)」にヒントを得たものである。P4Cは、1970年代にアメリカで始まり、大人からこどもへの一方的な知識の伝授ではなく、こどもたちの発想や疑問から出発して、対話のなかで考えを深めていく試みとして、南米やヨーロッパ、オーストラリア、韓国などさまざまな地域で行われている。



オーストラリア、ビューランド小学校の1、2年生の哲学の授業で描かれた絵。

P4Cの授業では、お互いの顔がよく見えるように円になって話をします。対話の素材として絵本がよく用いられるが、話を正確に理解し、主人公の気持ちを読み解くような国語の読解とは異なり、絵本が提起するテーマについて自分の考えることを自由に話してよい。「主人公はこうしているけど、それはどうしてかな?」「自分だったらこうはしないな」「私にもこれと似たことがあって、その時は・・・」という形で、絵本に触発されて出てくる意見に耳を傾けながら、テーマについて全員で考えを深めていく。扱われるテーマは「友だちって何?」「親切にするってどんなこと?」「不

公平/公平」など身近なものから「時間とは?」「人は死んだらどうなるの?」といった、大人でも簡単には答えられない問いまで広く扱われている。論理的・批判的に考えること以外にも、新しい考えに出会うこと、他人の意見に基づいて考えることなど、創造的・協働的思考も重視され、絵画や写真などの芸術作品も考える素材として用いられる。

こどものための哲学で一番大切なことは、自分や他人の考えにじっくり向かい合うことである。普通の学校の授業では、答えに早く到達することを求められ、自分や他の人がなぜそう考えるのかということに目をむける機会は少ない。こどものための哲学は、自分や他人の考えに



P4Cの多面的な風貌。円になって話し合い、みんなで議論する。テーマは「変化」。

丁寧に耳をかたむけ、どうしてそう考えるのだろうか、その理由を吟味してみる時間である。こう言うと、「それで何を学ぶことができるのですか、どうやって評価したらよいのでしょうか」とよくきかれる。たどりつくべき答えがないと、先生や大人は不安になってしまうからである。しかし、私たちは哲学的対話においては、自分たちが何を学んだか、自分たちの対話をどう評価するかを大人が決めるのではなく、こどもたちが自身で決められるようになることが重要だと考えている。もちろんすぐにそこまで到達できるわけではないが、大人は思い切って対話のプロセスをこどもにゆだね、それをサポートしながら、こどもたちが対話のなかで考える主体へと変化することを我慢強く待つ必要がある。

また、学校の中だけにとどまらず、海外では、少年院での対話活動や、重病を抱えたこどもや移民など社会参加から疎外されているこどもたちとの対話を積極的に行っている実践者もいる。周りの大人たちが驚くほど、こどもはどんな状況に置かれていても、自分や他人の考えに向かい合うことを通じて自尊心を高め、主体的に考え社会との関わりを見いだし存在に変化しようという。このような場面において、哲学的対話とは、人々をケアし、社会へ参加する資源となりうるのかもしれない。



たかはしあゆみ 大阪大学臨床心理学研究室にて哲学を学び、現在は哲学カフェ、こどもの哲学など、哲学の専門家ではない人々と対話し、共に考える実践に取り組んでいる。

いはじめました。

そんなとき、ある美術系メーリングリストでの発言にハッとしました。「今の病院にあるアートは院長の趣味が貰い物で、患者さんの事を考えていない。ある病棟にはいかに寄贈されたような暗い夕暮れ色の絵が飾ってあり、これを見て患者さんはどう思うだろう」というような事が書かれていました。「独りよがり」という言葉が浮かびました。それから、本当に患者さんのためになるアートとは何かをよく考えるようになりました。でも、流行の「癒しのアート」は私には全く興味の無いものでした。癒しとは何か胡散臭く、子どもには癒しより元気が必要だと思っていました。

作品には毒(刺激)がある、毒が無ければ何も訴えないのでは

「現代アートで子どもたちを元気にする」クリニックを!

松田 明 小児科医

クリニックにアート作品を展示しはじめたのは、10年ほど前からで、最初は私の趣味である現代アートの面白さを子どもたちにも味わってもらおうと考えました。その頃は地方ではまだ、ほとんど現代アートは知られていませんでしたし、今もそれほど興味を持たれてはいません。それでもいろいろ展示していると、何となくそれらによって子どもたちや職員も元気をもらっているのではないかと感じるようになり、より積極的に展開していきましました。お世辞かも知れませんが、このクリニックに来るだけで子どもが元気になると言うお母さんもいます。サンリオ発ではない本物のアートが何かに訴えるものがあるはずで、そして、「現代アートで子どもたちを元気にする」クリニックをめざそうと思



診察室。いろいろな飾りの中に作品がある。

ないか。何かを訴えるために作家は作品をつくり、観る者はそれを感じて感動する、そのやり取りで元気になるのではなからうか。

ただ自分の思うままの選択は身勝手な危険かもしれない。と云って、無難な当たり障りのない作品ではただの飾りになってしまう。子どもの好きな絵だけで選んでしまうと、子どもそれぞれ感じ方が違うのだから構わないと言ってしまうかもしれませんが、普遍的に人を元気にさせるアートがあるはずだ、そこにだれでも応用できるある一定の基準があれば良いだろうし、エビデンスのある何か方法は……。

小規模のクリニックで何が出来るのか。私はつい新人若手の元気な作家で占めてしまいますが、そのパワーとどう向き合うか、作品が子どもたちにとって良いものか、大人たちも楽しめるか、迷走しながらの展示です。本学会で何か答えが見つけれないか、模索しようと思っています。

ホスピタルサーカス第1回舞台公演 空想力学的さんぽ図鑑をみて

渡邊 あい子 立命館大学大学院先端総合学術研究科

2008年4月25日。バスに揺られ、病院近くで降り、同じ所へ向かうだろう人のあとをちょっとだけ歩くと、病院の広場にキリンをはじめとしたカラフルな動物たちや、サーカスのテント、ふしぎな大きい像のある庭が見えてきた。公演の受付にはひとつとして同じものがない動物のフェルトパッチが並んでおり、私はぞうくんをつけてもらった。それだけでもう子どもに選んだ気分である。さらに至れり尽くせりのセット(絵本とワークショップの記録冊子と映像を収めたDVD)をもらい、うきうきする。こんなにしてもらって無料だなんて!と恐縮したくなるくらいのおもてなし具合である。ああ、ホスピタリティ、と病院の語源を思った。



ホスピタルサーカスは、2007年11月から、滋賀県立小児保健医療センターにて、主に入院、通院している子どもたちを対象に計14回のさまざまなワークショップ(以下WS)を行ってきた(明治安田生命社会貢献プログラム「エイブルアート・オンステージ」活動支援プログラムの支援を受けて実施)。子どもたちは、それぞれの時間やあり方でWSに参加し舞台美術としてのしかけをつくったり、音楽を作ったりしてきた。その集大成が病院のみどりの広場にすでに広がっているようで、観客は色とりどりの動物が飾られた庭や、受付で配られた絵本、絵本についていた、光に当たるとときとおる折り紙の星や客席で新たに配られた傘にわくわくしている。3人のピエロが庭で音を出している。頭上にはたくさんのロープが病院の建物屋上につながっている。観客の一番前に座った子どもたちはロープを握っている。この舞台はノーキャスト。たぶん、このロープが重要なのだらうと思いがぐる。

物語は絵本をめくりながらすすむ。しかけの一つである不思議なスピーカーがぐるぐるまわってあっちこっちに音を振りまき、あつげにとられていると、そんなことおかないしにサーカステントの中の羊もまわりだした。よく見ると、子どもたちがロープを手繰っている。水でふくらんだキラキラする透明の手袋が次々に頭上のロープを通過し、きれいな音の雨が降って、私たちは傘を差す。あやしげな赤いマスクをしたホスピタルマンが登場し、えもいわれぬ存在感を放っている。蛇はふくらみ、小屋の窓から



入り口の水槽には水の中にも大小4つの地球が浮いて、水底に沈んだ地球の地図には「地球(地球の分布: 太陽から3番目・大きさ: 直径12,756km)」「エサ: 水、二酸化炭素、酸素が書かれている。「どうやって浮いているの?」「おまかせは?」「エサ、水と酸素もあって、地球の親子、育てているんだよ」等の会話が生まれている。



玄関ホール。双子の富士山が噴火している水筒が水を出し続ける。靴箱の側には、名和俊平作の見えない飛行機「ステルス」(實際ある方向からしか見えない)を天井に設置した立体作品を展示する。



まつだ・あきら 立命館大学医学部卒。小児科専門医。子どもの心相談医。平成7年より石川県能登市にて「まつだクリニック」開業。現代アートコレクションを提示する事で子どもたちの元気とアートの関係を模索中。

は雪が吹き出す。木が組み合わさってできているおおきな人も屋上につながったひもによって操られはげしく踊る。

こう書いても、なんのこともわからないかもしれないが、事実起こったこと。これがまたとってものしくて、あつという間のこと、なぜか泣きたいくらいだった。

公演が終わってから、子どもたち(かつての、も)はホスピタルサーカスの庭のさまざまな登場物ではしゃいでいた。公演はその庭で遊ぶためのたのしい誘いだったかのよう。みんなずいぶん長い時間そうしていたんじゃないか。

たくさんの舞台装置やからくりをつくったのは、その時々でWSに参加した子どもたち、親御さんやアーティストたち。けれど、ここは病院であって、入院していた子どもが退院することもあれば、通院の待ちいでWSに参加した人もいるかもしれない。病院にいる事情は様々で、この舞台の日にはそこに来れない子もいた。そのような流動的な場所にサーカスのテントを張って、そこにちょっとでも触れた人たちの、その時の想いが舞台になっていたと思う。それを、あのとき病院にいた子どもたちが表にこそ出ないけれど、かけらをつないでうごかしていた。その彼らも、いまは病院にいないかもしれないけれど。そういう意味では、公演自体も、つなぐ「しかけ」だったといえる。



アートに「役割」が求められるとすれば、それは「揺るがし」であろう。ホスピタルサーカスが行ったのは、子どもたちや大人たちにとってあまり好きにはなれない病院という場所に、治療という目的以外の、あそびを持たせるような、ゆるやかな「揺らぎ」の活動だ。それは勝手に参加者を募るのではなく、そこに旗を掲げておく、ある種積極的な「待ち」の姿勢で、広く多様な人が行き交う場所のあいだに存在するやわらかなWSのかたちであり、その行き交った痕跡を舞台上に見せたものだと思う。



わたなべ・あい子 立命館大学大学院先端総合学術研究科公共福祉。社会学で修士課程を修了。その後、佛教大学などで教えるつづきの現場に7年勤務。関合い、身体、呼吸、場所、ケア、アートなどを考えつつ2007年より現在の研究科に入学、研究中。個人的にはワークショップやものがつながって生成していく現場に居合わせることが好き。

高齢者介護施設でのアートクラス—自らを取り戻すために—

藤原 ゆみこ 美術家

1998年、親族の最期を看取ってもらった医師との出会いをきっかけに、主に認知症を抱える高齢期の人たちへのアートクラスをはじめた事となった。住み慣れた自宅で、家族に見守られた最期を実現させようと奮闘するその医師の熱意に、私自身、それまでの作品制作での漠とした違和感を、明確に意識させる何かを感じたからかもしれない。1987年ごろから、多くのパブリックアートにかかわり、毎年1、2回の個展を開催し、発表を続けてきた私にとって、それは大きな転換点であった。「なぜ、描くのか」そして、「描きたい」ということが何に由来するのか、「表現すること」が私にとって、人間にとってどんな意味を持つかが解りたくて制作が続いているともいえる日々のなかで、この高齢者介護施設でのアートクラスには、何か、とても根源的でしかも力強い答えがあるように思えてならなかった。さらに、私自身がさまざまな精神的苦境を描くことで乗り越えてきたという経緯が、美術の力が必ず、喪失感にさいなまれている人たちの日々の杖になるであろうという確信を深めさせてくれたのである。



普段、立つことがなかった方も、支えられながら粘土を練る

在宅医療を中心に 在宅医療を中心に行う医療法人が持つ2つの高齢者のためのデイサービス施設は、地域性もあって、要介護度の高い人が多い。どこの施設でもそうであるように、ここで職員は忙しい。午後の「アクティビティ」の時間は、課題に満ちていた。デイサービスセンターの利用者は、障害の程度や認知症の有無、身体状況にもかなりのばらつきがあり、視覚障害、聴覚障害を併せ持つ人も多い。30名以上のこうした受講者全員が満足感を持ってプログラムを行うことは、とても難しい。そのために、このような高齢者のための施設では、重度の障害のある人ができることを選択しがちで、「子どもっぽい」内容になってしまう。壁に貼られた作品群を見ても、それはあきらかだった。無理もない。ここにはアートのプロはいなかったのだから。

受講者は実に50~70年ぶりに絵筆を握る人たちである。アート・美術の時間だと聞いたとたん、「嫌い」「帰る」「できない」の声。確かに、常に受動的に生活する



施設エントランスの壁画 1999年制作

ことを余儀なくされている人たちにとって、すぐに積極的に取り組めるはずもない。根強い苦手意識と混乱は、迫力さえ感じるものだった……前途多難だった。

しかし、道ばたの花、草、海や風の音、香り、手触りをモチーフとして提示していくと、記憶の扉が開き始めるのだった。遠い幸福な記憶を呼び覚まし、時間をたどることが、



季節のモチーフの前に

今までの自己の人生を肯定的に捉えることにつながり、今現在の自分を受け入れていくことにもつながる。さらにそれを独自の記憶の色・イメージとして描いている。今までの自己の人生を肯定的に捉えることにつながり、今現在の自分を受け入れていくことにもつながる。さらにそれを独自の記憶の色・イメージとして描いている。

同じプログラムに参加した人たちが描いた作品が実にさまざまであり、「みんなちがう」ことにも新鮮な驚きがあったようである。通常、介助者は「みんな同じ」であることにこだわりがちであるが、表現行為はあくまで個人のもの。その違いを認めあうことが、他者への興味を引き出し、「会話」が生まれている。同じ施設に長い期間居合わせても、それぞれの利用者はお互いの名前さえ知らない(興味が無い)ことが多い。他者を感じることは、自分を見ることでもあるはずである。たぶん人は、人と関わることによって自らを見つけていくのであろうから……。

隔週のアートクラスを続けてきて10年になる。いまだに「こんなこととして何になるの?」という受講者の問いに、立ち尽くすこともある。「なぜ、描くのか」本当に、この問いへの答えは深く難しい。これに答える者は、表現することに常に真摯に向き合い、その深さを真に実感し、日々考える者でなければならぬと自戒を込めて思う。まさにこの問いは、「生きる」とは何か、何のために生きるのか」と、同義だと思ってしまう。このアートクラスは、常に発見と驚きに満ちている。色に対する感覚、形への本能的とも思える感情、そして触覚に対する感覚の記憶の確かさは、どんなに認知症が進んでも衰えていない。言葉が介在しない「表現」の世界は、もしかしたらこの方たちが最も得意とし、また必要としているものではないかと考える。そしてその「表現」のむかうところは「人間の生」そのものを考えるところであると思うのは、考え過ぎであろうか。

表現することは、自己を既存の概念から解放する術であり、「自ら」を真に取り戻すための術であると、私は思っている。そしてこれは、限られた者にものみ与えられているものではなく、すべての人に等しく与えられている本能であり、生きるために必須のことであるとも考えている。



ふじわら・ゆみこ/美術家。東京芸術大学大学院修了。同大学非常勤講師を経て、1987年アトリエエブナン設立。鹿間市立ハーモニーホール、地下鉄千代田線二重橋駅壁画等、多くのパブリックアート制作に携わる。同時に、毎年の個展での作品発表を軸としながら、1998年より、医療法人社 団いばらき会・美術顧問として高齢者介護施設での連続アートクラスを開始。他の、特別養護老人施設、病院、デイサービス施設、幼稚園等でも、ワークショップを展開している。

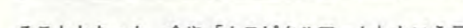
アートはこころの“クスリ”④

—ホスピタルアートの課題と可能性—

森口 ゆたか 造形作家、NPO法人アーツプロジェクト代表

病院や福祉施設などの療養環境に於けるアートの取り組みを、NPO法人アーツプロジェクトの生い立ちから現在までの活動内容を述べることでお伝えしてきたこの連載も、今回の4回目を迎え、いよいよ最後となる。最後にあたり、どうしても私が述べておきたい事は、「ホスピタルアート」という言葉とその定義についてである。1998年にイギリスに滞在していた私が、たまたま出会った“Arts for Health”という団体が、病院などの療養環境にアートを提供する活動を行っており、翌年にその団体が中心となり“CHARTS' 99”という国際シンポジウムが開催され、世界中から療養環境に於けるアートの可能性を信じるさまざまな職種の人達が集まり多くの発表と議論が交わされたのは、この連載の最初に述べた通りで、そこで得た経験や知識を是非日本に持ち帰り伝えたいと思った。

イギリスでもさまざまな団体が各々少しずつ違うコンセプトの下、繰り広げられていたこれらの活動のことを、何と称して日本の皆さんにお伝えすべきか迷った結果、一部の人たちには「ホスピタルアート」と呼ばれていたことを思いだし、「ホスピタル」も「アート」も日本人には馴染みのある外来語だし、一番ダイレクトに伝わる言葉だろう、と思い「ホスピタルアート」という言葉を使い始めた。すると、あれよあれよ、という間に、この言葉はさまざまな人たちの間で勝手に解釈を伴って広まることとなった。今や「ホスピタルアート」という言葉をネットで調べると、夥しい数ヒットすることになる。



療養環境に於けるアートの存在が、より多くの人に知られることになり、活動が広がる。

癒し系アーティストやカラーコーディネーターといった人たちの一部が、「ホスピタルアートをやっています」と述べられる。もちろんこれまで顧みられることのなかった療養環境におけるアートの存在が、より多く

この連載では、病院とアートをつなぐ取り組みを行っている森口ゆたかさんに、ホスピタルアートの実践を4回にわたって紹介していただきました。

の人達の関心事となること自体は素晴らしいことだと思うが、特定の人たちの商売に役立ったり、一時的な流行として捉えられたりでは非常に残念だ。日本の医療現場に適したアートのあり様は、これから多くの議論や実践がなされ、見出されるべきものだと思う。



イギリスにおいても、療養環境に於けるアートに対する考え方はさまざま、患者自らのアートを療養環境で繰り広げることが素晴らしい、とするグループもあれば、美術館や画廊でしか見られないプロの作品を療養環境でも体験することに価値をおくグループもある。また、精神や知的障害のある人たちが、アーティストと共に制作活動を行うことによって、精神の安定を保ち、退院して自宅に帰ってからも、社会から隔絶されたような孤独感に苛まれることもなく過ごせることを目的に活動しているグループもある。きっと彼らと共に制作活動を行うことによって、アーティストたちも刺激を受けているに違いない。

医療費削減の為の国家的政策の一環として、療養環境に於けるアートに取り組んでいるイギリスの裏事情を知ると、一概に素晴らしいとは賞賛もできないが、少なくとも彼らは、アートの力が人々の心や精神に影響を及ぼし、行動まで変えてしまうことを知っている。それに対し、日本はまだ行政レベルでの動きは期待できない。私たちのような草の根的な活動が全国に広まり、アートの力による、療養環境改善の為の小さな風穴を幾つも空けていきたい。



もりうち・ゆたか/造形作家として発表を続ける一方、芸術療法とは異なる医療と芸術の関りに可能性を見出し、アートの力で療養環境をより癒しの空間とすることを目的とするアーツプロジェクトを立ち上げる。

シリーズ

アートと NPO

アートで人とまちをシェアせよ

古賀 弥生 アートサポートふくおか代表

「アートサポートふくおか」は、「誰もが身近に芸術文化を楽しめる環境づくり」をミッションに掲げ、「子どもの芸術体験の機会拡大」と「文化政策やアートマネジメントに関する専門的な情報提供」を活動の2本柱としています。学校や地域にアーティストを派遣して授業やワークショップを行うコーディネート事業や、アートと地域をつなぐ人材の養成、そして文化政策の研究者やアートマネジメントの最前線で活躍する方々を招いてのレクチャーの開催などが主な事業内容です。

私たちがこうした活動をはじめた根拠にあるのは、アートが人を元気に、まちをイキイキとさせる力を有することへの確信と、アートが持つ力をもっと社会に活かしたいという想いです。2005年3月に発生した福岡県西方沖地震で被災した福岡市・玄界島の方々にアーティストとともに支援する活動を行ったのも、そうした想いからでした。この地震で島の人は全島避難を余儀なくされ、家族が島と福岡本土、2箇所の仮設住宅で分かれて暮らすことになってしまいました。壊滅的な被害を受けた島の再建と同時に家族団らんを取り戻すことも課題のひとつでした。

私たちは、島の小学校に、島に伝わる伝承をもとにした演劇作品や「いつかふるさとに帰るんだ」という力強い決意を歌った合唱曲をプレゼント。プロの演劇人や音楽家が指導して、子どもたちが大人の皆さんを勇気づける特別な学習発表会を実現しました。子どもたちの元気な歌声を聞いて、漁師のおじさんの日に焼けた頬に涙が伝う様子は忘れることができない光



景です。現在、島には新しい住宅が次々と建設され、家族一緒に生活を取り戻すことができました。

地震による被災という特殊な状況に限らず、学校で地域で、子どもも高齢者も障がいのある人も、すべての人にとってアートは「生きる」ことの根源的な力になります。また、まちづくりを考える際の中心的な概念としてアートを活用することにも、もっと注目が集まっていればよいのでしょうか。今後も「アートで人とまちをシェアせよ」を合言葉に、さまざまな機会をとらえて活動を展開していきたいと思っています。



こが・やよい/大学卒業後、福岡市役所入庁。在職中から芸術文化と社会をつなぐアートマネジメントを学び、芸術文化を身近に楽しめるまちづくりのための提言やフォーラム開催など実践活動を行う。2001年12月福岡市を退職。02年1月、「アートサポートふくおか」を設立し代表に就任。

文化政策学博士(京都大学)。久留米大学経済学部非常勤講師(地域文化政策論)。著書に「芸術文化がまちをつくる〜地域文化政策の担い手たち〜」(2008年5月九州大学出版会)

アートミーツケア学会誌 第2号 投稿募集

アートミーツケア学会では、学会誌第2号の発行に際し、会員・未会員のみなさまから投稿を募集いたします。学会誌第2号のテーマは、年次大会のテーマ「呼吸する〈からだ〉と〈こころ〉」と連動したものといたしますが、アートとケアに関するものであれば、その他のテーマを設定していただいても結構です。ホームページにて投稿規程をご参照のうえ、ふるってご投稿ください。
⇒詳細は、事務局までお問い合わせいただくか、ホームページ (<http://artmeetscare.seesaa.net>) をご覧ください。

募集区分

1. 論文 2. 研究ノート 3. 実践報告 4. 評論 5. その他

エントリーの期日

2008年2月28日(土)【投稿の締め切り：4月15日(水)】(いずれも事務局に必着)

アートミーツケア学会 入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くの方々に賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

- 大会の開催**
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。
- 調査研究の推進**
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。
- 学会誌の発行**
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。
- ニュースレターの発行**
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。
- フォーラム、シンポジウムの開催**
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。
- プログラムの開発、プロジェクトの実施**
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。
- 国際交流の推進**
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

会員種類・年会費

- 個人会員 一般 10,000円 学生 5,000円
- 賛助会員 30,000円

申し込み方法

- 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先 アートミーツケア学会
口座番号 00920-4-252135
- ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票(コピー可)をそえて事務局までお送りください。
- 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

役員(敬称略)

- 会長 鷲田清一(大阪大学総長)
- 副会長 畑 祥雄(関西学院大学教授)
- 常務理事 播磨靖夫(財団法人たんぼの家理事長)
- 理事 秋田光彦(浄土宗大蓮寺・應典院住職)
- 理事 片井 修(京大情報学研究所教授)
- 理事 グロッセ世津子(有限会社みどりのゆび代表)
- 理事 塩瀬隆之(京大総合博物館准教授)
- 理事 関口怜子(ハート&アート空間 Be-I 代表)
- 理事 ダーリング・ブルース(九州保健福祉大学教授)
- 理事 銅金裕司(メディアアーティスト)
- 理事 鳥海直美(千里金蘭大学現代社会学部現代社会学科准教授)
- 理事 中川 真(大阪市立大学大学院文学研究科教授)
- 理事 並河恵美子(NPO 法人芸術資源開発機構代表)
- 理事 本間直樹(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター/大学院文学研究科准教授)
- 理事 的場政樹(医療法人直志会袋田病院院長)
- 理事 見寺貞子(神戸芸術工科大学教授)
- 理事 森口ゆたか(NPO 法人アーツ・プロジェクト代表)
- 理事 森田ゆかり(金城大学短期大学部講師)
- 理事 山口悦子(大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学病棟講師)
- 理事 横川善正(金沢美術工芸大学教授)
- 監事 太田好泰(エイブル・アート・ジャパン事務局長)
- 監事 三浦久子(株式会社エイジレスラボラトリー会長)

アートミーツケア学会ニュースレター Vol.4 2008年12月25日発行

発行 アートミーツケア学会 <http://artmeetscare.seesaa.net/>
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 財団法人たんぼの家内 Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501 E-mail.art-care@popo.or.jp